

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2023.
April
No.194



Women's Studies Archive Issues and Identities



新入生にイチ押しの一冊

1 制作の周辺(1)ーこのしまおうこくー
図書館長 黒木 重雄

2 ブックレビュー

『愛するということ』
学長 国際文化学部 国際文化学科 教授 今井 尚生
『読書する人だけがたどり着ける場所』
副学長(総務担当) 法学部 法律学科 教授 石森 久広
『星の王子さま』
図書情報課 齋藤 珠緒
『聖書 聖書協会共同訳』
外国語学部 外国語学科 4年 鈴木 結生

3-4 世界の図書館

ケベック州国立図書館・文書館
外国語学部 外国語学科 教授 杉山 香織

国際機関資料室を知っていますか？

世界の図書館の入口として
図書情報課 川崎 陽奈

5-6 図書館から研究支援を考える

オープンアクセスの視点から
図書情報課 川崎 陽奈

7 蔵書ギャラリー no.34

Women's Studies Archive:
Issues and Identities
人間科学部 社会福祉学科
教授 中馬 充子

制作の周辺(1)

—このしまおうこく—

図書館長 黒木 重雄

とある木曜日、いつものように家を出て、いつもとは違う室見駅に自転車を停めた。地下鉄で博多駅。みどりの窓口にて【私】「京都往復窓側の席で」【駅員】「行きの窓側は空いてませんね」【私】「じゃあ行きは自由席で」となり、弁当やお菓子をかうための15分がホームで待つ時間に消えてしまった。せっかくの京都旅、窓側の方が気分が盛り上がる。弁当は車内販売で買えばいい。新幹線発車。本を読んだりスマホを見たり。と、そこに車内販売、1回目は様子見でスルー。2回目は声を掛けるタイミングを逃してアウト。そうだった、昔からこの手の“声掛け”は苦手なだった。ほどなく京都着。結局、コンビニでおにぎりとお茶を買って地下鉄へと乗り継いだ。蹴上(けあげ)に着いた。「ねじりまんぼ」なるトンネルを抜けたあたりからおにぎりを引っ張り出して食べ歩き開始。何せ今日は日帰り、のんびり座って食べている暇はない。とは言うものの、そぞろ歩く観光客は皆行儀がいい。私だけがモグモグ、テクテク、ムシャムシャ、2個目もモグモグ、テクテク、ムシャムシャ。ちょうど南禅寺の山門の前の道路を歩いている時だった。プップッと後ろから警告音。あ、まずい、不行儀でゴメンナサイ!と頭を下げながら振り返ってみると、タクシーの運転手がフロントガラス越しに“端に寄れ”の指サイン。なんと、いつの間にか車道の真ん中を歩いていた。いやはや、そんなに浮かれているのか? そう、その通り、もうすぐかんげつに逢える。

目的地の泉屋博古館(せんおくはくこかん)に着いた。『木島櫻谷—山水夢中—』展を開催中。来館者はちらほら。チケットを買って早速入場。前室の挨拶文や資料などに目を落としてはみるものの心ここにあらず。ぐるっと一周して先へと進む。中庭の見える廊下を渡った。いよいよメインの展示室。入り口に立つと透明黒ガラスの自動扉が開いた。と同時に奥に青白く光るそれが見えた。逢えた。手前の作品は後に回し、しとしととその正面に。木島櫻谷(このしまおうこく)作『寒月』、六曲一双の屏風絵、1912年制作、櫻谷36歳の作。下弦の月夜、雪に覆われた竹林に一匹の飢えたキツネが彷徨い、斜面上方からは雪煙が忍び寄る。



私がこの絵を知ったのは3、4年前、ネットをふらふらしていて偶然出くわした。その構図と色彩に一瞬で心を射抜かれた。リズム、バランスいずれにも一分の隙も狂いも無い。日本刀を思わず切れ味、ここまで研ぎ澄まされた絵はそうはない。

だったのだが、ちょっと困ったことになった。実は、その時見たのは右隻だけ。後日、左隻があることを知った。そして、その二つが繋がった状態で見ると、やや印象が違った。「櫻谷先生、竹林が少々浅くはありませんか? もっと深い竹林を思い描いていたのですが……」。鬱蒼とした竹林を勝手に想像していた私にとっては左隻がやや物足りない。どうして? 機会があれば実物を見て確かめたいと思っていた。その機会が、ついに訪れた。正面からじーっと見据えて1分2分、右に左に3分4分、前に後ろに5分6分、これを5回くらいも繰り返したのだろうか。やっぱり物足りない。もっと深い竹林が在って欲しい。あ、待てよ、右隻と左隻を離せばいいのか。そして、その隙間に竹林を想像すればいいのか。作者も案外そのつもりだったりして……。離すことが前提ならば、両隻は其々それなりに完結しておく必要がある。先述の通り右隻は完璧。左隻はどうだろう。単独で見れば第4扇から第6扇の白みは巧妙、画面に広がりを与えながらも緊張感を醸し出している。さらにキツネは振り返らせることで第1扇への収まりもバッチリ。それなりにどころか冴えわたっている。「右隻と左隻は其々が完結した作品じゃ、ピッタリ繋がるようにしておいたが、おすすめは1尺ほど開けて並べることじゃ」こんな空耳が聞こえた。目を閉じて、ガラスケースの中の絵を少しずらして深遠な竹林を思い描いてみた。「ああ、いい」。妄想しながらの独り言しきり。

2時間ほど居ただろうか。外に出ると斜めの日差しになっていた。帰路に就くとほとほと歩を進めた。新幹線まではまだ時間がある。通り道だったので知恩院に寄った。御影堂で一休み。「100年以上も後の世に、自作に見惚れてくれる人がいるなんて絵かき冥利に尽きるだろうなあ」とポツリ。香が心地よかった。すっかり暗くなった7時15分、いつものように自転車で帰宅した。今日はピリリとした一日だった。



『寒月』木島櫻谷 大正元年(1912) 絹本着色 屏風 六曲一双(各167.0cm×372.0cm) 京都市美術館



新入生にイチ押し[☆]の1冊



『愛すること』

エーリッヒ・フロム著 鈴木晶訳 紀伊國屋書店 2020年
(4階B:通常書架 152/0/5-2A)

学長 国際文化学部 国際文化学科 教授
今井 尚生



「愛とは何か」考えたことはありますか。それは、他の生物にも見られるような本能でしょうか、それとも人間独自の感情でしょうか。フロムは、人間にとっていつの時代にも変わらない根本問題は、いかに孤独を克服するかであり、その問題に対して人類が見出してきた最も大切な答え、それが「愛」だと言います。

フロムの特徴はフロイトの始めた精神分析に社会学の視点を加味したことで、それは現代人の恋愛の分析にも表れています。例えば、市場原理が支配する現代社会においては、いかに自分にとって有利な交換をするかに関心が集中します。そのような考えに染まると、自分と釣り合いそうな相手の中で、社会的に魅力的とされる人に会ったとき、人は恋に落ちる傾向がある、と言うのです。

大学生は自分なりの考えをもつことが必要とされます。しかしもう一歩進んで、自分がどうしてそう考えるようになったのかを反省できる力が大切です。そのような内省する力を身につけるために、思想的な書物をじっくりと考えながら読む時間をもつように心掛けてください。

フロムは「愛は技術である」と言いますが、これはどのような意味なのでしょう。ここで「技術」と訳されているのは、英語の“art”という言葉です。皆さんも是非、本書を道案内として「愛とは何か」を考える旅に出てみませんか。

『読書する人だけが たどり着ける場所』

齋藤孝著 SBクリエイティブ 2019年
(3階E:ブックツリー外回り 019/0/301)

副学長(総務担当) 法学部 法律学科 教授
石森 久広



さあ、困りました。新入生にイチ押し[☆]の1冊ですか。私が「新入生」のころから早や40年、今、自室で机の周りを取り囲む(数えてみると)15ある本棚のスペース9割は、専門書や原稿書きに使ったファイルでごった返しています。その余波で、若いころ読んだ本の多くは、やむなくリサイクルの憂き目にあいました。それでも手放せなかったものを取り出してみると、留学先のドイツ関連(これは仕事?)、前任地熊本を知るため読み集めた漱石関係(これも仕事?)、熱烈に応援している野球チームゆかりのあれこれ(これは義務)、を除けば、井伏鱒二編『読』(1985年)、谷沢永一編『書齋』(1991年)、紀田順一郎編『古書』(1992年)などなど、「本」にまつわる随筆ものが多く、どうやら若いころの私は「本」そのものにあこがれていたようです。今、行きついた先は「仕事部屋」ですが、みなさんには、ぜひ、人生を豊かにする「読書」を重ね、将来、そんな本に囲まれた「書齋」で豊かな時間を過ごしてもらいたいと願っています。そこで、みなさんに(ネットでは味わえない)「読書」そのものの魅力を伝えられたらと、読みやすく新しい、齋藤孝『読書する人だけがたどり着ける場所』をお勧めしたいと思います。

『星の王子さま』

サン=テグジュペリ著 河野万里子訳 新潮社 2006年
(3階 G:電動集密 095/953/2B)

図書情報課
齋藤 珠緒



王子さまは、どこに行ったんだろう。
言葉を文字通りにしか読み取れない、7歳の私が初めてこの本を読んだときの感想です。

もし、あなたがどう見ても帽子にしか見えない絵を、これは象を飲み込んだ大蛇の絵なんだ!と言われたら、どう思いますか。そんなの屁理屈だと思いませんか。でも、王子さまと同じ“あの頃”の私たちだったら…。

私たちは、知らず知らずのうちに大人になっていくのでしょうか。そこには境があるのか、グラデーションのようなものなのか。それこそ、“目には見えない”ものです。特に、これからの大学生活、新しいことをたくさん経験し、次第に慣れを感じる場面も増えます。そうした時間を経て、いわゆる大人になってしまふ。なつて“しまふ”と言いましたが、なにも、それが悪いことだと言いたいわけではありません。ただ、子どもと大人の狭間にいる今だからこそ、感じられるものが確かにあるのだと思います。

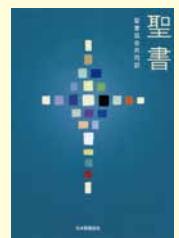
世界で愛されるこの本は、今更この場で紹介するまでもないかもしれませんが、それでも新入生の皆さんに読んでほしい、手に取ってほしいと思う一冊なのです。

これから始まる大学生活、皆さんが心に感じたこと、思ったことを大切に。形あるものに、こだわりすぎずに。だって、大切なものは目には見えないのですから。

『聖書 聖書協会共同訳』

日本聖書協会 2019年
(2階 G35~42:電動集密 193/0/249)

外国語学部 外国語学科 4年
鈴木 結生



BBCラジオの人気番組「Desert Island Discs」では毎回、ゲストに「もし無人島に一冊だけ本を持っていけるとしたら何を選びますか?」という質問をします。面白いのは、この質問が「但し、無人島には予め聖書と沙翁全集があるものとする」という前提付きだということ。この二冊はいわば殿堂入り級の書物であり、わざわざ選ぶまでもないからだそうです。それなら何故、私がここでわざわざ聖書を選んだのかといえば、多分、その島にはKJV(英訳聖書)しかないだろうから。私ならやはり読み易い日本語訳を持っていきたい。

冗句はさておき、聖書は二つの意味で本の本です。まず聖書自体が多様なジャンル、時代背景、思想から成る沢山の書物を合本している一冊の本である、という文字通りの意味において。次に聖書はあらゆる他の書物の元型となつたザ・本である、という意味で。裏返せば、この一冊さえ押さえておけば、間接的に世界中の全ての本を読んだことに…は流石にならないにせよ、コスパ最強本なのです。

最後に、大学での学びを始めようとする新入生の皆さんへ、私のお気に入りの聖句の一つ。「書物はいくら記しても果てしなく体はいくら学んでも疲れるばかり。聞き取ったすべての言葉の結論…」(コヘレトの言葉12:12-13)この続きを知りたい方は是非、頁を捲ってみてください。

世界の図書館

[カナダ編]



ケベック州国立図書館・文書館 Bibliothèque et Archives nationales du Québec

475 Boulevard de Maisonneuve E, Montréal, QC H2L 5C4
<https://www.banq.qc.ca/>

カナダ

外国語学部 外国語学科 教授 杉山 香織

モントリオールは、トロントに続くカナダ第2の都市である。モントリオールには4つの大学があり、そのうち2つがフランス語、2つが英語で教育が行われる。それぞれ総合大学であるため、各大学にいくつもの専門図書館が存在するが、今回は誰でも利用可能なケベック州国立図書館・文書館を紹介する。

ケベック州国立図書館・文書館は、モントリオールを走る地下鉄3路線が交わるBerri-UQAM駅に位置する。地下鉄と図書館は直結しており、簡単にアクセスすることが可能である。特に、厳しい冬が長く続くモントリオールでは、地下からアクセスできるという点はとても大きな利点となる。2005年に地下1階、地上5階から成る現在の建物が完成した。外観はガラス張りで近代的であるが、内装には木材が多く使用されているため、温かみも感じられる。吹き抜け階段とインテリアは、少し西南学院大学の図書館をほうふつとさせ、親近感を覚える。

この図書館は大きく分けて【Bibliothèque nationale(国立図書館)】、【Les Archives nationales(国立文書館)】、【La Grande Bibliothèque(大図書館)】の3つに分けられる。【Bibliothèque nationale】は1968年以来、ケベック州のすべての出版物の収集と管理を行っている。ここでは、ケベックで出版された著書はもちろんのこと、ケベックを主題として扱う著書や、ケベックに関連する著者による書物がすべて収蔵されて

いる。ケベック州では、フランス語の地位と質の向上に向けた言語政策が行われており、この【Bibliothèque nationale】もその役割の一端を担っている。【Les Archives nationales】は、ケベック州に存在する10の公文書館のうちの一つであり、ヌーベル・フランスのはじまりから今日までのケベックの歴史に関する豊富なアーカイブを保存している。

このように、以上の2つはケベック州やフランス語に関する専門性が高い書物や資料を扱うが、【La Grande Bibliothèque】はより一般層に向けた図書館となっている。書籍、雑誌、新聞、映画、CD、ビデオゲーム、地図、楽譜など約350万点以上の資料が収蔵されており、フランス語の書籍や資料のコレクションについては北アメリカ最大の規模を誇る。また、デジタルブック、音楽、雑誌、映画などもダウンロードでき、オンラインで見ることが可能である。知覚障がい者に向けた、デジタルオーディオや点字を利用した資料のコレクションも利用することができる。

図書館は開放的で、読書スペースや勉強スペースもたくさん設けられているため、利用者も多い。さらには、図書館としての機能のほかにも、ワークショップ、読み聞かせ、映画などの文化イベントを年間数百回提供している。学術的貢献だけでなく、社会的にも重要な役割を持つ図書館なのである。



[写真1 地下鉄直結の図書館入り口]



[写真2 西南学院大学図書館をほうふつとさせる内観]



[写真3 モダンな雰囲気の図書館外観]

国際機関資料室を 知っていますか？

世界の図書館の入口として

図書情報課 川崎 陽奈

国際機関資料室とは

国連寄託図書館・EU情報センター・OECD協力資料館からなる資料室で、図書館3階に位置しています。

この資料室では、国連やEUなどが発行する資料を閲覧できます。

国連寄託図書館とは

国連寄託図書館とは研究者、政策立案者、市民が国際連合 (United Nations, UN) の情報にアクセスできるようにすることを目的として設置される図書館で、国連文書や刊行物を所蔵、公開しています。本学では1968年に国連寄託図書館として資料の受け入れを開始しました。現在では、国連公式文書システム (Official Document System, ODS) で多くの国連文書がオンラインで公開されており検索、閲覧することができます。

※国連公式文書システム (ODS) :

<https://documents.un.org/prod/ods.nsf/home.xsp>

EU情報センター

欧州連合 (European Union, EU) への理解を深めることを目的として世界に約500のEU情報センター (European Info, EUi) が設置されています。本学の国際機関資料室は1969年に日本で最初のEC資料センター (現在のEU情報センターにあたる) として資料の受け入れを開始しました。EUの各機関の出版物や資料を受け入れ、大学においてEU研究の手助けをするだけでなく、EUへの理解を深めるための拠点として、一般にも広く公開されています。

※Europa Server(欧州連合のポータルサイト):

https://european-union.europa.eu/index_en

OECD協力資料館

1969年以降長い間、経済開発協力機構 (Organisation for Economic Co-operation and Development, OECD) の発行する出版物 (単行本、逐次刊行物、各種報告書類等) を受け入れてきました。現在ではデータベースOECD iLibrary[※]を通してOECDの発行物を閲覧することができます。

※OECD iLibrary

本学が契約しているデータベースです。OECDの発行する報告書をオンラインで閲覧できるほか、統計データベースを利用してオリジナルの統計表を作成することもできます。VPN接続をすれば、学外からもアクセス可能です。

図書館
HP

>

データ
ベース

>

OECD
iLibrary

本学図書館の主な利用者は、学生・教職員、卒業生です。基本的に一般の方は利用することはできませんが、この国際機関資料室は違います。図書館の中であって利用者に資料を提供するだけでなく、外部の方にも公開されています。図書館の3階にあります。図書館の中の1つの施設、とは少し意味が異なるのです。

本学の国際機関資料室の始まりは、1968年に国連寄託図書館となったことです。1969年には国内で最初のEC資料センターに、その後OECDの寄託図書館になりました。それから50年以上にわたって、各種資料を収集、保存し、提供しています。

本学には、国際関係に関心のある学生が多く在籍しています。英文学に関心がある人、国際法に関心がある人、外国の文化に関心がある人、そして国際機関に関心がある人、一口に国

際関係といってもその対象は人によって様々です。大学において、それらを学ぶ方法はいくつもありますが、図書館に来て書架の資料を探したり、契約しているデータベースを活用したり、或いは国際機関資料室に足を運んでみたり、といったことも方法の一つです。探してみるとと色んなところに世界へ繋がる扉がありますよ。

例えばいきなり海外へ留学するのはハードルが高いと感じていて、それでも国際関係の学びを深めたいという思いを持つ人がいたとしたら。そんなときは、図書館や国際機関資料室を訪れてみてください。皆さんが知りたいと思えば、世界の図書館の入り口として、そこで得られる学びはきっとあります。もちろん、何か分からないことがあれば、職員に気軽に相談してください。図書館は皆さんのより良い学びをサポートします。

図書館から研究支援を考える

オープンアクセスの視点から

図書情報課 川崎 陽奈

図書館の研究支援と学修支援について、図書館報No.190,192,193で学修支援に焦点を当て、紹介、検討してきました。今回は研究支援に焦点を移し、多岐にわたる図書館の研究支援の中でも最近のオープンアクセスに関連するトピックと課題を一図書館員の視点で整理し、今後の研究支援について考えてみたいと思います。

1. 図書館の研究支援とは？

図書館の行う研究支援は多岐にわたります。従来から図書館が担ってきた研究支援としては、まず蔵書の構築及び情報へのアクセスの安定した確保と提供という視点から、図書(電子ブックを含む)の購入・提供、雑誌(電子ジャーナルを含む)の契約管理・提供、データベースの維持管理等が挙げられます。また、図書館のサービスの視点からは、閲覧、ILL(図書館間相互貸借)、レファレンス(文献調査、著作権等)、利用教育(ガイダンス、講習会)等があります。加えて、近年は研究成果の公開という視点から、機関リポジトリの運用や、将来的には研究データ管理への寄与も挙げる事ができるでしょう。

【図1】図書館の研究支援の例

情報へのアクセスの安定した確保と提供
・図書(電子ブックを含む)の購入、提供 ・雑誌(電子ジャーナルを含む)の契約管理、提供 ・データベースの維持管理等
サービス
・閲覧・ILL(図書館間相互貸借) ・レファレンス(文献調査、著作権等) ・利用教育(ガイダンス、講習会)等
研究成果の公開
・機関リポジトリ、研究データ管理 等

これらの研究支援を行う上で、特に資料の安定的な提供という視点では、資料費の継続した確保や毎年値上りする雑誌購読費への対応等が本学図書館でも近年大きな課題となっています^{※1}。また、契約管理の面では、例えば電子ジャーナルや電子ブックについて、本学では2014年頃から本格的に導入していますが、その管理と提供についてもまだ模索している状況です^{※2}。

このように資料の安定的な提供を考える上で課題はいくつもありますが、それらの具体的な検討は別の機会に譲り、今回は図書館の担う研究支援のうち、近年図書館が担うようになった研究支援について、「オープンアクセス」をキーワードに3つトピックとして取り上げてみたいと思います。

2. グリーンオープンアクセスと機関リポジトリ

1つ目のトピックはグリーンオープンアクセスです。「オープンアクセス(OA)」とは、学術論文等を誰もが無料で自由にアクセスできるようにする

ことです。オープンアクセスは「グリーンオープンアクセス」と「ゴールドオープンアクセス」に大別されます。グリーンオープンアクセスは著者が論文をセルフアーカイブし、機関リポジトリ等で公開することで、論文を無料で読めるようにするものです。日本は長くグリーンオープンアクセスを推進してきており、グリーンオープンアクセスの基盤として、800を超える大学で機関リポジトリを構築しています。本学でも2014年に機関リポジトリを構築し、主に紀要論文を登録・公開してきました。2021年3月にはオープンアクセス方針を策定し、図書館報191号でもその内容を紹介しています。

【表1】コンテンツ別の登録件数(2023年3月末時点)

種別	登録件数(件)	種別	登録件数(件)
紀要論文	1,819	学術雑誌論文	2
博士論文	37	学内刊行物	6

機関リポジトリはセルフアーカイブによりオープンアクセスを推進することを目的の一つとしており、紀要のほか学術雑誌論文や発表資料等を登録し、そのメタデータが外部のデータベースにハーベスト(収集)されることで、研究成果や教育成果を広く社会に公開し、還元していく受け皿となることを目指しています。グリーンオープンアクセスの視点から、紀要に加えて学術雑誌論文を、機関リポジトリを通じて公開できるように整備することは、既に大学図書館の役割の一つとなっています。本学では、紀要論文の登録は継続して行っているものの、学術雑誌論文の機関リポジトリへの登録は2件にとどまっています。学術雑誌論文の登録にあたっては、論文によって権利関係等の確認が必要となり、この確認から登録までの流れを通常の業務として継続して行えるようにすることが本学図書館の課題です。また、ただ登録するだけでなく、登録したコンテンツについて、閲覧回数やダウンロード回数の統計を取得、提供することで研究者にフィードバックすることも検討する必要があります。

学術雑誌論文の登録に加えて、今後取り組む課題として「DOI(デジタルオブジェクト識別子)」の論文への付与が挙げられます。DOIは”Digital Object Identifier”の略で、デジタルコンテンツを含めたあらゆるコンテンツに対して登録される永続的な識別子(URI:Uniform Resource Identifier, 統一資源識別子)です。DOIを付与することで、コンテンツに永続的なURLが付与されるため、引用が容易になり、論文へのアクセシビリティが向上します。DOIにはいくつか種類がありますが、本学図書館はジャパンリンクセンター(JaLC)の準会員となり、JaLCが管理するJaLC DOIのプレフィックスを取得しています。今後できるだけ早くコンテンツへのDOIの登録を開始できるよう準備を進めていきたいと思っています。

3. ゴールドオープンアクセスと転換契約

2つ目にゴールドオープンアクセスと転換契約について紹介します。ゴールドオープンアクセスとは、論文の雑誌への掲載時に論文掲載料(APC:Article Processing Charge)を支払うことで、利用者が無料で論文を読めるようにすることです。オープンアクセスを進める動きの背景の一つとして、継続した学術雑誌の価格の高騰が挙げられます。毎年値上が

りする学術雑誌に対して、図書館の資料費には限りがあり、本学でも予算の関係で雑誌の購読中止や入れ替えが発生し、資料の継続した提供が難しくなりつつあります。

グリーンオープンアクセスが主に論文の著者最終稿を機関リポジトリ等で公開することで、オープンアクセスを進める動きであるのに対して、ゴールドオープンアクセスは雑誌の購読料に代わって、APCを出版社に支払うことで、論文のオープンアクセス化を進めるものです。現在は、APCの支払いは著者が行っている一方で、図書館では引き続き雑誌の購読費を支払っており、場合によっては出版社に二重の支払いが発生していることも考えられます。これに対して世界的にも動きがありますが、国内では大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)が、2019年にOA出版モデル実現までの移行期を乗り越える道筋を明らかにすることを目的として、「購読モデルからOA出版モデルへの転換をめざして～JUSTICEのOA2020ロードマップ～」を公表し、2023年2月にはその改訂を行っています^{※4}。OA出版モデルとは「研究成果を「読む」ために料金を支払う購読モデルに対して、研究成果をOAで「出版する」ことに主眼を置くモデル」です。最終的には全ての雑誌がフルオープンアクセスになることを目指すものですが、その過程として、図書館から出版社に対する支払いを購読費からOA出版料にシフトさせることを意図した「転換契約」を大学として選択し、個別の出版社と契約を締結するところも現れています。転換契約を検討するためには、大学全体として研究者がそもそも各出版社にどのくらいAPCを支払っているかを把握することがまず必要です。例えば、財務システムにAPCを入力する項目を設けることが考えられます。APCの支出金額や件数は大学の規模によってさまざまであるため、調査結果によっては従来の購読モデルを維持する方が適切である場合もあるでしょう。また、海外では国やコンソーシアム規模で個別の出版社と転換契約を結ぶ事例もありますが、国内ではこれまでのところ一機関や複数機関と個別の出版社との間で結ばれる動きにあります。なお、転換契約は購読モデルに代わる最終的な契約方法ではなく、あくまでOA出版モデルに移行するための過渡的なものとして位置づけられます。また転換契約に移行することで、図書館の支払う購読費は抑えられますが、大学としての支出は当然新たな形で発生します。このように転換契約はあくまでフルオープンアクセスに向けた契約形態の1種であり、それによって図書館或いは大学の抱える問題を一気に解決するものではありませんが、まずは今後の選択肢の一つとして、国内或いは世界的な動向に注目しながら転換契約等新たな仕組みの選択について比較、検討してみる必要があるように思います。

4. 研究データ管理と機関リポジトリ

3つ目のトピックとして、図書館の新たな研究支援として研究データ管理への寄与を取り上げます。研究データとは、研究の過程で、あるいは研究の結果として収集・生成される情報です。「第6期科学技術・イノベーション基本計画」(2021.3.26閣議決定)では、機関リポジトリを有する全ての大学等において、2025年までにデータポリシーの策定率が100%になること、公募型の研究資金の新規公募分において、2023年度までに、データマネジメントプラン(DMP:Data Management Plan)及びこれと連動したメタデータの付与を行う仕組みの導入率が100%になることが目標として掲げられています。また、科学研究費助成事業(科研費)では、2024年度以降、当該研究課題における研究成果や研究データの保存・管理等に関するデータマネジメントプラン(DMP)の提出が求められる予定になっています^{※7}。

このように大学や研究機関には、データポリシーの策定や研究データ管理を行う体制の構築が求められており、本学でも数年以内に取り組みが必要が出てくるのではないのでしょうか。既にデータポリシーを策定し、研究データ管理を行う仕組みを検討している大学もあり、2023年4月7日現在、少なくとも15の大学で研究データ管理ポリシーを策定・公開しています。研究データ管理については、国立情報学研究所が研究データ管理サービスである「GakuNin RDM」を提供しているほか、研究データの公開先として機関リポジトリが候補の一つとして挙げられています。「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議まとめ)」(2023.1.25)でも大学図書館に求められる教育・研究支援機能や新たなサービスとして研究データ

オープン化への寄与についても言及されています。研究データ管理ポリシーの策定や研究データ管理体制の構築にあたっては、図書館だけでなく研究推進部署や情報処理センター等の関係部署との協力が不可欠です。また、ポリシーや体制の構築だけでなく、今後は研究支援そのものについて、図書館員も研究のライフサイクルを理解するとともに、その各段階に応じてどのような支援ができるのか改めて考えることも必要ではないでしょうか。

5. 図書館の研究支援

ここまで「オープンアクセス」をキーワードに最近の大学図書館に関わる研究支援のトピックを紹介しつつ、それに関わる本学図書館の課題を一図書館員の視点から整理しました。研究支援と一口に言っても、その幅は広く、図書館が従来から提供しているサービスもあれば、機関リポジトリのように近年新たに普及してきたもの、研究データ管理のように他部署と連携して取り組むことが想定されるものもあります。

研究・学修の両方の視点から資料の収集、保存、提供、そして近年は研究成果の公開の一端を図書館は担っていますが、継続した支援・サービスを行う前提として、学術情報流通や研究支援に関わる最新の動向を把握しつつ、大学の規模や分野、方針を踏まえて本学の図書館としてより良いあり方を常に模索することが求められていると思います。

図書館として利用者に必要な研究支援を行うために、本稿で取り上げた機関リポジトリのほか、閲覧、レファレンス、ILL、資料の購入、契約、提供等、これらの従来から行っている支援について、継続した業務の振り返りやその向上に向けた検討が必要です。安定したサービスを提供することは前提としてありますが、図書館や研究に関わる状況が目まぐるしく変化する中で、同じものを提供し続けるだけでは、時代に即したサービスを提供することはできません。業務の振り返りに加えて、学術情報流通に関わる様々な動きがある中で、図書館員それぞれが常に情報を収集し、知識や能力の向上に努めること、全体としては最新の動向を踏まえて、新しく取り入れられることや取り組む必要があることを見極め、反映していくことが、結果として継続した支援・サービスの向上につながるのではないのでしょうか。

参考文献(最終閲覧日 2023年4月3日)

- ※1 詳しくは図書館報187号、188号をご参照ください。
<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/publications/>
- ※2 本学のeリソース管理の实情と課題については、以下の論文で紹介しています。坂本里菜「eリソース管理实情と今後の課題:地方私立大学のいち事例として」(『薬学図書館』67巻3号、2022年、p96-101)
https://doi.org/10.11291/jpla.67.3_96
- ※3 西南学院大学オープンアクセス方針
https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/files/uploads/seinan_OApolicy.pdf
- ※4 ※5 「購読モデルからOA出版モデルへの転換をめざして～JUSTICEのOA2020ロードマップ」(2023年2月27日改訂、大学図書館コンソーシアム連合)
https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/justice/2023-03/JUSTICE_OA2020roadmap-20230227_JP.pdf
- ※6 「第6期科学技術・イノベーション基本計画」(2021年3月26日閣議決定)
<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/6honbun.pdf>
- ※7 「公的資金における研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方」(2021年4月27日 統合イノベーション戦略推進会議)
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_jyohoka01-000015787_06.pdf
- ※8 「国内大学の研究データポリシー(一覧)」AXIES-JPCOAR研究データ連絡会に8大学の研究データ管理ポリシーの記載がある。
<https://sites.google.com/view/axies-jpcoar/project/%E5%9B%BD%E5%86%85%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%83%87%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%9D%E3%83%AA%E3%82%B7%E3%83%BC%E4%B8%80%E8%A6%A7>
- ※9 GakuNin RDM サポートポータル
<https://support.rdm.nii.ac.jp/>
- ※10 「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議まとめ)」(2023年1月25日、科学技術・学術審議会 情報委員会 オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会)
https://www.mext.go.jp/content/20230325-mxt_jyohoka01-000028544.pdf
- ※11 研究データ管理ポリシーの策定にあたっては、大学ICT推進協議会(AXIES)が「大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン」を作成しているほか、オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)や国立情報学研究所(NII)が作成した各種トレーニングツールが公開されている。
・「大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン」
https://rdm.axies.jp/_media/sites/14/2021/07/urdp-guideline.pdf
・JPCOARウェブサイト
<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>
・研究データ管理セルフラーニング教材
<https://contents.nii.ac.jp/hrd/rdm>

『Women's Studies Archive: Issues and Identities』

女性研究アーカイブ・シリーズ第1部「女性問題とアイデンティティー」

[電子ブック]



【図1】
‘Mr. President, How Long Must Women Wait For Liberty?’ Suffragists picketing the White House in, Jan. 1917

The Woman's Journal, vol. 1, no. 1, Mar. 1917



【図2】
"Women's Labour League. (英国女性労働連盟)", The Labour Woman, no. 1, May 1913.

歴史上の各時代にあらわれ、成立した様々な制度、組織および、それらについて著される多くの論説は、なぜその時代にあらわれ、つくられたのだろうか、また、それらの活動に携わった人々はどのような意図に基づいてそのように行動したのだろうか。歴史研究の醍醐味は、これらの疑問に歴史資料を根拠として迫れるところにあり、学問としての意義もそこに集約できよう。しかし、そこで求められる地道な一次史料の発掘作業は容易な営みではなく、研究者に相当なしぶとさとセンスを要求するものであることも周知の事実である。

さて、その手掛かりを支援できる素晴らしいデータベースが、本学図書館に用意されているのをご存知だろうか。以下では、近年新たな展開を見せている社会的弱者としての女性問題を取り上げ、筆者自身の研究課題に結び付けてその紹介を試みたい。

女性研究アーカイブ・シリーズ^{※1}の第1部「女性問題とアイデンティティー」は、第二波フェミニズムの草の根団体、女性参政権運動、女性と労働運動、女性と平和運動、女性と宣教活動、産児制限と優生学、ヨーロッパの女性雑誌などに関するコレクション15種類を収録している。原本所蔵館はスワースモア大学、ハーバード大学シュレジンガー図書館、スミスカレッジ、社会史国際研究所(アムステルダム)、オレゴン大学、GLBT歴史研究会などで、19世紀から20世紀にかけての定期行物、書籍、文書が約110万ページに亘って収録され、しかも、OCR(光学文字認識)によるフルテキスト検索を可能にしたという。

本学「生命倫理学の学際的研究」メンバーを中心に発刊した山崎喜代子編「生命の倫理」3シリーズ、「生命の倫理—その規範を動かすもの—」2004年、「生命の倫理2—優生学の時代を越えて—」2008年、「生命の倫理3—優生政策の系譜—」2013年、およびカレン・J. シャフナー編「EUGENICS IN JAPAN」2014年を取り纏める中で、研究会のメンバー

が米独仏の現地を奔走し蒐集したオリジナル史料も管見する中で見出すことができた。

たとえば、マルサス主義連盟の月刊誌『ザ・マルサシアン』(1879~1921)、優生学教育協会の季刊誌『ユージェニクス・レビュー』(1909~1921)、あるいは1922年に来日し山本宣治らと意見交換したマーガレット・サンガーによる「アメリカ産児制限連盟」の内部文書(1918年~1974年)といった具合である。さらには、世界各国でキリスト教布教活動を展開した女性宣教師に関する文書も含まれている。

GALE^{※2}によるデータベースによって歴史資料蒐集の利便性が格段に高まる一方で、国内に在って国立国会図書館や公文書館、執筆者の遺族をたどり遺稿や写真、戸籍謄本を拝借するなど、歴史資料を従来どおりアナログ的に吟味することも忘れてはならない。とりわけ、優生学にあつては、十分な証拠を伴わない科学・技術と社会に関する言説の普及によって、排除されていった人々の存在を思うと、優生学に関わった人々の社会的責任は非可逆のかつ重大であった。

社会科学においては、ジェンダーやセクシュアリティの視点を取り入れた研究成果が着々と蓄積されつつある。より一層整備が進むデジタル化された学術資料に対して、いかに効率的にアクセスできるかが、研究者や教育者にとって重大な意味を持つてくるに違いない。研究分野にかかわらず、アナログ的な歴史資料の重要性を忘れることなく、デジタル化された歴史資料探索の利便性を味わっていただければ幸いである。

【参考文献】

※1 「女性問題とアイデンティティー」2017年、「女性の声とビジョン」2020年、「アメリカ古書協会所蔵 稀少タイトル・コレクション1820-1922」2021年、そして「世界の女性の先駆者たち」2022年の4シリーズからなるデジタル・アーカイブである。

※2 米国の教育出版社センゲージラーニングの図書館部門「GALE」では、利便性を高めるためにデータベース講習会など、様々なデモンストレーションを提供している。

<https://www.gale.com>

編集後記

春がやってきました。出会いと別れ。きっと皆さんもそんな場面に立ち会ったのではないのでしょうか。

大学も、見知った顔ぶれが旅立ち、フレッシュな新入生を迎え入れました。別れの寂しさと、出会いの喜び。これから何度も味わうであろうこの気持ちを、いつまでも新鮮に感じられる自分でしたいものです。

どうか、図書館があなたの居場所のひとつになりますように。ご来館、心よりお待ちしております。(T.S)

西南学院大学図書館報 No.194

2023年4月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。